

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：12601
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2012～2015
 課題番号：24730409
 研究課題名(和文)津波被災地における地域社会の復興と被災者の生活再建のあり方をめぐる社会学的研究

 研究課題名(英文)A Sociological Study on community recovery and life revitalization in tsunami-devastated area

 研究代表者
 定池 祐季(SADAIKE, YUKI)

 東京大学・大学院情報学環・特任助教

 研究者番号：40587424

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、津波被災地における復興のあり方について、北海道南西沖地震(1993年)を経験した北海道奥尻島における追悼行事と防災教育、災害文化に着目し、社会的に考察を深めることを目指して調査研究を実施した。奥尻町における追悼行事は、行政、遺族会、住民有志によって行われていた。行政の追悼行事は2013年に終了したため、主体的な発信の場が限られることとなった。遺族会と住民有志の活動は続いており、その中で災害伝承が行われている。スマトラ島沖地震(2004年)以降は、防災教育や教訓発信が求められるようになり、依頼に基づく発信が始まった。東日本大震災以後は、住民による主体的な災害発信が行われ始めている。

研究成果の概要(英文)：The Hokkaido Nansei-oki Earthquake generated a tsunami that caused huge damage in the southwest of Hokkaido. This study discusses a research on the disaster recovery, especially tsunami memorial event and disaster education in Okushiri Island. Tsunami memorial event started in 1993. Town office closed event in 2013. Then they cannot share their message. The bereaved family and A group of residents keep their ceremony.

After the the Sumatra Earthquake in December 2004, the Okushiri town office started sharing its preparedness and reconstruction program to people outside the island. The town hall designated key persons to answer inquiries from outsiders and has been generous in sharing their experiences in this regard.

After the Great East Japan Earthquake in March 2011, the Okushiri town office and residents have received requests for interviews. And Some of them started voluntary to pass on their experience.

研究分野：社会学

キーワード：災害復興 災害文化 津波災害 奥尻島

1. 研究開始当初の背景

日本における災害への社会科学的アプローチは、新潟地震(1964)を契機として本格化したといわれている(大矢根 1998)。それから約半世紀にわたって、多くの研究者によって多様な研究が展開されてきている。特に阪神・淡路大震災(1995)が日本の災害研究に与えたインパクトは大きく、災害発生からの時間の経過に伴って被災地の抱える課題が変化していくことから、被災地に長期的に関わる研究が必要であるという認識が高まる契機となった。この阪神・淡路大震災は都市型の戦後最大の地震災害であった。

一方、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震に端を発する東日本大震災は、戦後最大の複合型災害である。地震、津波、そして原子力発電所の事故によって、複数県に及ぶ広域かつ複雑な被害が発生しており、被災地の復興が急務となっている。しかし、津波災害に注目した場合、被災地の復興に関わる社会学の知見は日本海中部地震(1983年)、北海道南西沖地震(1993年)時の調査が中心であり、その中でも長期的な調査を行ってきた研究者はごくわずかである。その主要な理由として、日本は災害多発国であり、次々に発生する災害の調査に追われてしまうことが考えられる。しかし、その繰り返しにより、災害から長期間経過した後、様々な被災地で見られている共通する課題について、体系的にまとめられてこなかったという課題がある。

申請者はこれまで、複数の集落が津波により壊滅的被害を受けた北海道南西沖地震(1993年)の最大の被災地である北海道奥尻島において、「災害文化」「防災教育」という切り口を通して、その復興過程をたどってきた(定池 2008、定池 2009)。そして、噴火常襲地である北海道有珠山との比較から、奥尻島では未だ過去の災害に対して、「どのような災害であったのか」という認識の共有ができておらず、そのことが奥尻町の「災害文化」の継承を妨げていることを明らかにした(定池 2011a)。そのため、研究の次の段階として、奥尻町の復興状況、人々の生活再建状況について、詳細な検討を加える必要があるという結論に至った。

そして、2011年3月11日以降の東日本大震災の主要な課題の一つに、津波被災地の復興、被災者の生活再建があげられる。しかし、近年の国内の事例である奥尻町の復興過程を長期的な視点を持って体系的にまとめたものは、未だ出されておらず、貴重な事例であるにもかかわらず活かされていないという現状が見られていた。

2. 研究の目的

本研究では、北海道奥尻島における被災者の生活再建と地域社会の復興状況を質的・量的調査によって多面的に明らかにし、津波被災地における復興のあり方について、社会的に考察を深めることを目指した。具体的には、奥尻町を取り巻く社会的状況の変化、ライフヒストリーの収集による個人・世帯の生活再建過程の整理を行った。

3. 研究の方法

本研究課題の遂行にあたり、以下の方法で研究を進めた。(1)対象地域の地域特性を把握した上で、資的調査を中心に、災害前後の社会的環境の変化、災害過程の整理を行った。(2)ライフヒストリーの収集により、被災者の生活再建過程を明らかにした。(3)追悼行事と防災教育に関する資料調査、参与観察から、これらの変容を明らかにした。(4)(1)~(3)を踏まえて、北海道南西沖地震から20年を迎える奥尻町の行政、地域社会、家族・世帯、個人の生活再建状況、復興状況、復興観について多面的に検証した。その上で、津波被災地における長期的な復興のありかた、被災地域社会の持続可能性について、総合的な考察をし、理論的検討を進めた。

また、奥尻町との比較のために、有珠山周辺地域、沖縄県でも災害文化に関する調査を行った。

4. 研究成果

(1)北海道南西沖地震は、縮小社会に向かう奥尻町を襲った津波災害であった。

奥尻町における追悼行事は、時間の経過に伴って実施主体、行事内容、参加者などが変化しながら、ゆるやかに継続している。行政主催の追悼行事は、町として公式に犠牲者を悼むのみならず、支援に対する感謝や、復旧・復興に関わるメッセージを内外に発信するという場にもなっていた。しかし、災害発生後5年以降は行事回数の減少に伴い、発信の機会も少なくなった。2013年で行政主催の行事が終了したため、行政が主体的に北海道南西沖地震に関するメッセージを発信する機会はほぼなくなってしまった。遺族会連合会、地区遺族会が主催となる追悼行事は、目的が犠牲者の供養という明確なものである。中でもM地区遺族会は、毎年法要・会食・黙祷という形式を保っていることと、来訪者を受け入れているという点で特徴的である。近年は取材などを目的とする来訪者が増加しているため、来訪者への災害伝承の機会にもなっている。また、遺族有志、遺族以外の有志が中心となっている追悼行事は、灯籠を流す、ろうそくに火をつけるといった内容であり、やや開かれた行事である。灯籠流しは近年同じ様式が保たれている一方で「ろうそくを灯す会」は、特に2011年から2013年まで

は島外からの役割期待を鑑みて活動内容が大幅に変化した。それに伴う現場の混乱が一部見られたが、近年は落ち着きを取り戻しつつある。

奥尻町の防災教育は、2004年のスマトラ島沖地震後、津波防災に関心を持つ島外からの視察や学習が増加し、対外的な発信の機会が増加した。そして東日本大震災以降、奥尻町への注目の高まりが発信の機会の増加につながり、教育旅行という形で主体的に発信しようとする動きが見られている。つまり、奥尻町の防災教育は、島外から注目され続けることにより、「津波被災地の先輩」という被災地役割を認識し、主体的に災害伝承を始めようとする段階に入りつつあるといえる。

(2) 奥尻町の災害伝承、災害文化との比較のため、同じ北海道内の火山噴火の常襲地である有珠山周辺地域の災害遺構保存と災害文化との関連性について調べた。

当該地域において火山遺構を保存することができた背景として、大きく3点が考えられる。まず、住民主体の活動であったこと、次に、多様な専門家が活動をサポートしたこと、そして、災害遺構を糸口に、有珠山とのつきあい方、地域の将来を考える住民運動へと展開したことである。

そのようにして保存された遺構は、エコミュージアムからジオパークへと、広域連携と地域振興を念頭に置いた地域内外の防災教育の生きた教材として活用されている。住民運動を展開した主要メンバーは、遺構保存の働きかけと並行して「ガイドの会」を結成し、遺構の一般公開後に語り部的活動を本格化させた。このほか、以前より活躍していた地域のキーパーソン達に加え、2000年噴火後に組織された住民団体や、「火山マイスター」制度により、多様な人材が災害遺構を活用する語り部・担い手として活躍するようになってきている。

一方、2000年噴火から15年が経過し、植生の回復や建物の損傷によって、火山活動を体感することが困難な遺構が目立つようになってきている。現在は簡易な作業によって保全を図りながら、ガイドによる伝承方法を模索している。加えて、火山遺構が多数存在しているため、新たな遺構を公開することも検討されている。

このように、有珠山周辺地域では、遺構保存のプロセスで住民が遺構保存の意義やそれに関わる災害観を共有し、関係者を増やし災害文化を醸成してきた。しかし、遺構の状態変化により、災害伝承、災害文化にとっても過渡期にあることが明らかになった。

(3) 津波伝承、津波災害文化の比較のために、宮古島、石垣島の災害伝承について調査を行った。宮古島では、津波に関わる祭祀が残されていた。一方で、担い手の減少など、他地域の伝統文化をめぐる課題と

同様の課題に直面していることが明らかになった。石垣島については、1771年に発生した「明和大津波(八重山津波)」に関して、体験談や伝説、ことわざなどの形を取って残されていた。これらは、「明和大津波」の直後や、そう間を空けずに伝えられ始めたものである可能性が高い。1980年代には、住民による伝承活動が始まった。それまで津波石の調査などを行っていた牧野清氏をはじめとする市民が中心となって慰霊塔が建立され、慰霊祭が行われるようになった。この活動は住民有志に限られていたが、のちに石垣市が引き継いで慰霊祭を実施することにより、追悼行事を通じた災害伝承が市民に共有される可能性が広がった。

また、2011年には4月24日が「市民防災の日」、同日から1週間は市の防災週間に位置づけられた。これは、過去の津波災害と将来の津波防災・減災をつなげる試みであり、過去の災害を伝える災害文化から、防災・減災の意味を持つ減災文化を含んだ災害文化へと、石垣市の災害文化が変化しつつあることがうかがえた。

以上のことから、奥尻町の災害文化について検討を加えると、奥尻町内には、公式に「災害遺構」と位置づけられたものはない。災害を伝えるモノが少ない中で、災害を伝える困難さを抱えている。また、有珠山周辺地域のように遺構保存の過程で災害経験をコミュニティとして受容し、解釈するようなプロセスを経ていないため、特に復興過程の共有、発信がなされにくい状況を生み出している。その中で活躍しているのが語り部である。有珠山周辺地域のような人材育成の仕組みはないものの、それぞれの持ち味を活かした活動を行っている。また、石垣島のように、地域内で災害文化を共有できる広がりを持たせることや過去の災害と将来の防災・減災を関連づけることは、内発的になされていない。しかし、東日本大震災の発災後、かつての「被災地責任」としても、災害経験、復興プロセスの発信が求められる事態になった。そこから主体的な発信の兆しも見られるようになってきているため、今後も経過を見守る所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

定池祐季、有珠山周辺地域における災害遺構の保存と活用、復興、査読無、13号、2015、57-62

<http://f-gakkai.net/uploads/gakkai/hi/13-1-8SADAIKE.pdf>

定池祐季、北海道奥尻町における災害伝承の変容、北海道地区自然災害資料センター報告、査読無、27号、2014、57-62

〔学会発表〕(計6件)

定池祐季、津波「非」常襲地における津

波災害文化の変容-石垣市を事例として、日本災害情報学会、2015年10月25日、山梨大学（山梨県甲府市）
定池祐季、津波「非常襲地」における災害文化の継承-沖縄県を事例として、地域安全学会研究発表会（春季）、2015年5月29日、大島町開発総合センター（東京都大島町）
定池祐季、災害遺構を通じた災害伝承-洞爺湖有珠山ジオパークを例に、日本災害復興学会、2014年10月25日、アオーレ長岡（新潟県長岡市）
定池祐季、北海道奥尻町における津波災害伝承の変容、日本災害復興学会、2013年10月13日、関西大学高槻ミュージックキャンパス（大阪府高槻市）
定池祐季、津波被災地における追悼行事-北海道奥尻町を例として-、日本社会学会、2012年11月3日、札幌学院大学（北海道江別市）
定池祐季、津波災害からの復興過程における防災教育の変遷-北海道南西沖地震から19年を経た奥尻島を例に、日本災害情報学会、2012年10月26日、東京大学（東京都文京区）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

定池 祐季（SADAIKE, Yuki）

東京大学・大学院情報学環・特任助教

研究者番号：40587424